
花びら、ひとひら、ひとしづく

三条司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花びら、ひとつひら、ひとしづく

【著者名】

Z5543D

三条司

【あらすじ】

僕が学校へと向かう道にある、立派なお屋敷。そこの窓から誘つようにして僕を見つめる、白い手。お母さんには秘密です。お父さんにも秘密です。クラスメイトの蓮沢くんにもお屋敷には近付くなと止められました。でも、僕はあの白い手に会わなくてはいけないです。

小学校までは歩いてほんの十五分。その道のりに、必ず通るお屋敷があります。いかめしい外觀とは違つて、お庭からはいつも良いにおいがします。塀が高くて僕には中は見えないけれど、きっとお花がたくさん咲いているのでしょうか。

お花は好きです。学校では園芸委員をしていろくらご。お花に囲まれるのは幸せです。

お屋敷のお庭を、いつもベンディングから見てみたいと思つてこます。けれど、ひとのおうちに勝手に入るのはとても失礼なこと。

ひとりで塀づたいにお屋敷のそばを歩いていると、ついつい塀の中が気になります。だから僕はふと上を見上げてしまつ。やつするとい、必ず見えるものがあります。

白い手。

それはそれは、雪のように真白い手なんです。そしてとてもきれい。お屋敷の塀よりほんの少し上に見える部屋の窓から、その手はいつもひらりひらりと揺れているのです。

はじめて見たときは、とても驚きました。まるで僕がお庭を見たいと思つていてるのがばれたみたいだつたから。その日の夜は一生懸命お印様にお祈りしました。僕がひとのお庭を覗き見しようとしたことを許してくださいって。でも、やましい気持ちなんて何もないことをどうか解つてくださいって。

お印様に僕の祈りは届いたのでしょうか。

僕は学校を休んだことはありません。皆勤賞を、去年いただきました。雨の日だって風の日だって、ちゃんと毎日学校に行っています。そして、毎日あの白い手を見ます。

その手は本当に白くて、もうすぐ透明になつてしまいそう。もち

ろんそんなことはないのだけれど。窓からそっと出でているその手はいつも、不安げに、繊細に、控えめに、揺れているのです。

そのうち僕は考え始めました。あの白い手は、いったい誰のものなんでしょう、と。女人なのかしら。男人なのかしら。いったい、いくつくらいのひとなんでしょうか。

大人の女人の人かもしません。僕のお母さんはいつも忙しい忙しいと言つてゐるけれど、あの白い手の持ち主は忙しくないのかもしません。大人の男の人かもしません。僕のお父さんは毎日お仕事でおうちに朝早くに出て行きます。もしかしてあの白い手のひとは、お仕事をしないひとのかもしません。だつて、いつ見てもあそこにいるんですもの。

毎日見るその白い手に、やがて僕は親しみを覚えるようになります。あの白い手が窓から出て、風を撫でるようにしてゐるのを見ると、何だかほっとします。朝夕、通りかかるたびに見えるその手は、僕にいつらつしゃいとおかえりなさいを言つてゐるみたいですね。そう感じるたびに、僕もその白い手に向かつて答えます。いつまいりますとただいまかえりましたを、心の中で唱えるのです。でも、いつたいぜんたいあれは誰の手なのでしょうか。

お屋敷は立派な建物です。門扉は頑丈な木で出来ています。そしてその扉には美しい模様が描かれています。でも僕は、その扉が開いているところを見たことがありません。とても不思議。お屋敷には誰も入りません。誰も出できません。ずっと見張つてゐるわけではないから、絶対とは言えない。それでも、お屋敷は誰に触れられることもなく、じつとその場に佇んでいるのだと思います。

一度、あのお屋敷についてお母さんに尋ねたことがあります。お母さんは僕よりもたくさんことを知つてゐるから、あの白い手についても何か知つてゐるかもしないと思って。ですがお母さんは僕がお屋敷の話をした途端、とてもこわい顔になつて、一度とあの

お屋敷には近付かないようにと言いました。

僕の通学路なのに。でも、それも仕様のないことです。あのお屋敷の傍の道は、本当は通学路ではないからです。学校が決めた通学路はお花が見られない道ばかりなので、僕はこつそり違う道順で学校に通うことにしたのです。もちろん、それは先生方にもお母さんにも内緒です。

あれ以来、お母さんにはあのお屋敷の話はしたこと�이ありません。白い手のお話も。あの白い手は僕の秘密。学級のこたちも、お屋敷のことは知らないみたいですね。僕だけの秘密です。

白い手はいつもいつも、あの窓からそよいでいるだけ。寂しくはないのでしょうか。僕なら淋しい。堀の中からはお花のかぐわしいにおいがするのです。そんなお庭が近くにあって、どうしてお庭に出来ないのでしょう。窓から見える景色は、学校の窓から見える空のように四角張つていはるはずです。それだけで良いのでしょうか。

いいえ。そんなわけはありません。もしかしたら、あの白い手はお部屋から出られないのかもしません。

どうして今までそれに気付かなかつたのでしょうかー。

きっとそう。あの白い手は病氣のひとのものなのです。体調が優れなくて、だからお部屋から出られないのです。そして、少しでもお外に触れていたいと想つて、あの白い手を毎日窓から差し出しているのです。

それに気付いたのは国語の授業中でした。ぼんやりと白い手のことばかり考えていた僕は、先生に質問されても何のことだかさっぱり分からず、注意散漫だと注意を受けました。それほど、僕は白い手のことを四六時中考えるよになつていたのです。あの指が動く様を、まるで舞踊のように空気を匂いでいく様を。

季節がめぐる速さを、夕暮れを感じることが出来ます。学校から帰るときは、たいてい夕方になります。日は少しづつ長くなっています。

つていいよつです。夕陽がきれい。

薄紫が、僕のまわりにたちこめています。そんな中でも、あの白い手は変わらずそこにあります。夕暮れを掘もうとしているかもしだせません。

かわいそうな白い手。

「倉崎くん」

授業が終わって、帰つ支度をしていたときでした。蓮澤くんが僕に話しかけてきました。

僕は、蓮澤くんとはあまりお話をしたことはありません。たしか、少しの間入院していたはずです。僕はどんな顔をして良いのやらわからず、何故か人目をはばかるように近付いてきた蓮澤くんをじつと見つめました。

「倉崎くん、キミの家はどこなんだい？」

と、蓮澤くんはやぶから棒に聞いてくるのです。僕は内心少し戸惑つたのだけれど、素直に、

「花岸通りから少し裏手に入ったところだけれど。それがどうかしたの？」

「だつたら、キミ……」

呴くように言つてから、蓮澤くんは黙つてしましました。口元を手で隠して、じつと教室の床を見つめています。僕はますますどうしていいかわからずに、ただその場に立ち尽くしました。長い長い何秒かのあとに、蓮澤くんは意を決したように顔をあげると、僕の瞳をのぞきこみ、低い声で、

「だつたらキミ。あのお屋敷は通学路ではないんじゃないのかい」

僕の心臓はそれを聞くと同時に激しく飛び上がりました。どうして蓮澤くんがそれを知っているのでしょうか。どうして僕があのお屋敷のそばを毎日通つていることを知っているのでしょうか。

しりを切ることも出来たのでしょうか。でも僕は昔から嘘をつくのは苦手なのです。だからといって本当のことなど言えない。もし蓮

沢くんが先生や僕のお母さんにそれを知らせたら、さつと僕はお屋敷には一度と近付けなくなってしまう。あの白い手に、一度と会えなくなってしまう。それはとっても困ることなのです。何故って、僕はあることをもうすでに思いついていたから。それには、ある屋敷に近付くことはとても大切なことだったから。

そんなわけで、僕は蓮沢くんの知的で切れ長な瞳を見つめ返せずに、またしても黙っているだけしか出来なかつたのです。すると、蓮沢くんはその長身を屈めて僕の耳元に口を寄せると、

「キミ、今ならまだ間に合つよ。ある屋敷に近付くのはよしたほうがいい。これは警告だからね。じゃ、またあした」

真摯な口調でそれだけを言つてしまつと、僕の返事などお構いなしにさつと教室をあとにしてしまいました。

どうして、ある屋敷はそんなにみんなに嫌われているのでしょうか。

その日の帰り道は何だか特別なものでした。蓮沢くんのことばは怖ろしかつたけれど、僕はどうしてもあの白い手に会わなくては、と感じていたのです。

お屋敷に近付くにつれ、ぴゅうぴゅうと音を立てていた風は次第に勢いをまし、お屋敷の前の通りに着くころには風は荒れ狂つようでした。

お屋敷のお庭に咲き誇つているはずのお花たち。それが、今は風にあおられてその可憐な花びらを空に捧げていました。それはそれは幻想的なその光景を、僕は何かを見守るよつた気持ちで見つめていました。

真白い花びらが風と一緒にダンスを踊つています。その軽快なりズムは、花びらを地面よりもはるかに上方、空に向かつて花びらを誘つているようです。夕焼けはもう終わりの方で、空のてっぺんはそろそろ闇色。花びらは優雅に空を舞い、窓へと降り立ちました。

白い手の窓です。

僕は足を止めて、窓を凝視しました。少しだけ開いたままの窓からあのか細い白い指が姿をあらわしました。そして花びらをそつとその指でつまんだのです。

嘘じやあありません。風はびゅうびゅうと音をたてていたけれど、それでも僕には聞こえたのです。そつとため息をつく誰かの声を。聞き間違えなんかじやあありません。あれは白い手のため息。やっぱりお花が恋しいのでしょう。

その瞬間です。僕が決心したのは。

あの白い手に、お花のプレゼントをしようとした僕はそのまま心に決めたのです。

何のお花が良いかしら。あの白い手に一番似合つむ花。出来れば匂いのかぐわしい、可憐でたおやかなお花。

お夕飯を食べている間もお風呂に入っている間も、お布団に入つてからもずっと僕はそのことばかりを考えていきました。

夢の中でさえ僕はお花とあの白い手のことを考えていました。柔らかい嵐のような風にのつて、僕はふわふわと宙を舞つのです。気付けば地面よりもはるかに遠いところに僕はただよつていて、周りにはそれを祝福するかのように花びらが舞っています。そして僕は唐突に気付くのです。僕は今からあの白い手に会いに行くのだと。この僕の周囲にあるお花を連れて、白い手のお見舞いに行くのだと。目が覚めてもまだ、夢の余韻は消えずにいて、僕はまるで腑抜けたまま朝御飯を食べました。

僕の周りをただよつていたお花は、千鳥草でした。不思議。千鳥草が舞うなんて。でも、千鳥草の清楚でいて芯の強そうな趣は、白い手に良く合つことでしょう。夢にみたのも何かの思し召しかもしれません。

昨日に続いてまた、蓮沢くんが話しかけてきました。僕は何だか後ろめたいような気持ちで、おはよう、とだけ返しました。

「キミ……」

そんな僕に、蓮沢くんは何かを言おうとしたついで、口元に手をやつて黙りこくつてしまします。まだ教室には人がまばらで、僕はいよいよ居心地が悪くなつてきました。

「倉崎くん、昨日はよく眠れたかい？」

妙に不安げに、蓮沢くんはそう尋ねました。

とても言いにくそうに、でも聞かなければならぬといった風に。涼やかな両の瞳は心配げに僕を見つめています。何だか僕まで不安になつてしまいそう。

「うん。とても良い夢を見たんだ。どうしてそんなことを聞くの？」

「夢？ そうか……いや、あまり顔色が良くないようだから。寝付きでも悪かったのかと思つてね」

「そうかな？ 体の方は何ともないよ。ほらこの通り」

僕は憂いを含んで眉根を寄せた蓮沢くんを安心させたくて、その場でぴょんぴょんと飛んでみせました。その拍子に、僕の背負つていた通学鞄からはらりと落ちたものがあります。昨日の花びらに違ひありませんでした。風に舞っていたあの花びらのひとつが僕の鞄にもぐり込んでいたのでしょうか。それを見た蓮沢くんははっと目を見ると、

「倉崎くん。後生だから、あのお屋敷にだけは近付かないでくれたまえ。これは、キミのためでもあるんだぞ」と、声を落として言うのです。

そして僕がその真意を問う間もなく、蓮沢くんは僕から離れていつしまったのです。

蓮沢くんのことはよくは知らないけれど、きっと良い人ののだと思います。同じ年のこたちに比べると背の高い蓮沢くんは、雰囲気も言動も大人びていて、みんなの憧れの的です。

そんな葦沢くんがお屋敷に近付くなと一回も言つたのです。冗談ではないと思います。

でもね。

もう、決めたのです。

だつて園芸部の花壇に千鳥草の花が、いつもよりもずっと早くに花を咲かせたのです。本当はあと一月ほど待たなければならぬといつのに。

放課後、葦沢くんの悲しげな視線から逃れるようにして僕は教室を飛び出しました。校舎の裏にある花壇から千鳥草を三本、手折りました。『めんね千鳥草さん。でもきっと、貴方を歓迎してくれるひとに今から届けるから。

昨日とはうつてかわって風のない日でした。

お屋敷のまわりはいつもよりも更に静まりかえって、僕の息遣いが唯一の音のようです。

塀を見上げて、いつも窓を見ました。が、窓はぴたりと閉じられていて、白い手もみあたりません。

これは一体どうしたことでしょうか。予想していなかつた出来事に僕は動搖してしまいました。白い手に、何かあつたのでしょうか。無事なのでしょうか。

塀を隔てて窓を見つめたまま、僕はどうすることも出来ずにその場をうろうろと歩きました。そしてふと思いついたのです。あの扉。頑丈そうなあの門扉。あれはまだ、閉じたままなのでしょうか。そろそろと人目を気にしながら僕は扉に向かつて歩き始めました。窓さえ開いていれば、僕は白い手に向かつて声をかけるつもりだったのですが。仕方ありません。だつてもう、千鳥草は手折つてしまつたんですから。人のおうちに勝手に入ろうとしている、ということに緊張してきました。悪いことをしている。その自覚があるのにまだやめようとしない、それの方がもつと悪い。だけれども。

悩みつつも近付く僕の前に、頑丈で落ち着いた扉がそびえ立ちます。そしてそれは、驚いたことすうつと音もなく開いたのです。

少しだけ。ほんの少し。それはまるで僕を招き入れるよう。花の香りに誘われる虫のように、僕は開いた扉から中を窺つてみました。思つてはいた通り、扉からは立派なお庭が垣間見えました。色とりどりのお花は咲き乱れ、葉っぱは健康そうに良く繁り、得も言わぬ香りが僕の鼻をくすぐります。ここは季節が止まつてしまつたみたい。

なるたけ扉をそれ以上開けないよう、千鳥草を傷付けないように注意しながら、僕は体をお屋敷の敷地内へと滑り込ませました。白い手を、早くみつけなくちゃ。

千鳥草を持つ手が汗ばんできました。早く早く。心が逸れば逸るほど、足がもつれて上手く歩けない。音をたててはいけない。頭の中はもうパンクしてしまいそう。

そんな僕の耳にあのため息が聞こえてきたのです。消え入るような、儚げなあのため息。白い手に違ひありません。聞き間違いをするはずがありません。僕は出来るだけ耳をすませて、そのため息の方向を探り出そうとしました。そこへもう一度。僕から見て左側、いつも白い手がいる窓の方角と同じです。でも、上の階にはいなかつた。今だつて、窓はぴたりと閉じられたきり。

お花を踏んでしまわないように、爪先立ちで僕は歩きました。ため息の方向へ。白い手に導いてくれるだろう方向へ。そして、やつと見つけました。塀の真向かい、白い手の部屋の真下、お庭に直接面したような角部屋。そこの窓が開け放たれていて、出窓になつているそこから、見慣れた手が揺れているのでした。

「ああ……」

僕は小さく感嘆の声を洩らします。やつと。やつと会えましたね。感慨深くて、何だか泣けてしまつそう。潤んできた視界を、目をこすつてきれいにします。そして、僕はついに白い手に出逢つたのです。

僕は学級でも背の低い方です。僕の額がちょうど窓の一番低い位置にあたります。だから中は見られない。でも、白い手はその細く

て長い手首をしなやかにくねらせています。心臓がどきどきと音をたてています。白い手の窓辺に、僕は千鳥草の花を静かにおきました。

と、白い手の動きが止まります。訝しんでいるのでしょうか。ためらいがちに千鳥草に触れました。

「お、贈り物です。どうか、受け取つてください」

震える声で僕がそう告げると、白い手は今度こそ千鳥草を手に取りました。匂いを嗅いでいるのでしょうか。かすかな、息を吸う音がします。そして、笑い声。それは可憐で清楚な、千鳥草によく似合つ、千鳥草がよく似合つ女の人の笑い声でした。これに気を良くした僕は、

「『』病気なのですか？」

と、聞いてみることにしました。

ややあつてから、

「…ええ。そうですの」

「『』病気が早く治られると良いですね」

「いいえ。これは不治の病。治ることなどあらませんのよ、親切

なお花屋さん」

「不治の病？」

「治す方法があるにはあるのだけれど、それはとても難しいのです」

「そうなのですか……」

こんなにきれいな声の持ち主が、不治の『』病気だなんて。僕は悲しくなつてしましました。治す方法がほとんどないだなんて。どんなに心細いことでしょう。

「お花屋さん？」この千鳥草はどうで手に入れてこられたのかしら。とても良い匂い

「それは、僕が育てたものです。園芸部なのです」

「まあ、それはそれは。大切にさせて頂くわね」

「少しでもお気持ちが晴れると良いです。千鳥草の花言葉を『』存

知ですか？

「いいえ、知りませんわ。親切なお花屋さん」

「ふたつあるのですけれど……。ひとつは『誰もがあなたを慰める』、そしてもうひとつは『あなたは幸福をふりまく』。あなたの白い手を、毎日見ていたのです。そして、僕は毎日、あなたの手を眺めることで幸せを感じています。これからは、その千鳥草によつて、あなたのお加減が良くなりますようにと、お願いしておきます」

ふふ、と微笑んで、白い手が窓から姿を現しました。優雅な仕草でおいでおいでをしています。僕はその所作に見とれながら数歩、窓に近付きました。

「手を」

言われるままに僕は自分の手の平を差し出そうとして、それが汗でしみつているのに気付きました。ごじごじとズボンで拭いてから、改めて手の平を窓に差し出します。それでも窓の位置は高くて、僕はちょっと爪先立ちにならなくてはなりませんでした。

白い手が僕に触れました。冷たい手。まるで氷でできたよう。形の良い指が丸まって、何かを僕の手の平に渡しました。それは花びら。何のお花かはわかりません。見たことのないお花。薄い紫色をしたそれは、いつか見た夕陽の色です。纖細で今にも飛んでいくてしまいそう。僕は慌てて手の平を閉じました。

「ありがとうございます、親切なお花屋さん」

夢見心地、というのにはこういうことをこうのだと思い知った気がします。本当に、今日の出来事は現実だったのでしょうか。それほどまでに、僕は心を打たれてしまったのです。もちろん、あの白い手にです。

帰る道すがら、僕の足はまるで大地を踏みしめることを拒否するかのようにふわふわとして、もしかしたら背中に羽でも生えてしまつたのかしら、背中の通学鞄が羽に変わつてやしないかしらと何度も振り返りました。その度にちらりと見えるお屋敷の塀や門扉を見つめでは、ほうと切ないため息をついて足を止めてしまいます。空

を見上げればもうずいぶんと暗くなつていて、その深い紺色も、ああ、何て素敵なのでしょう。

お母さんは心配していたみたいでした。どこかで道草をくつていたのか、それとも何か事件に巻き込まれたのかと尋ねられたので、華沢くんという同級生とお話をしていたと答えました。咄嗟に何といふ嘘をついたものでしょつか。こんなにすらすらと言い訳ができるのは初めてです。お母さんはその答えに渋々ながらも納得してくれました。

その夜。僕はなかなか寝付けませんでした。さうと、まだ僕はあるの白い手との夢にひたつているのでしょうか。その気分をわざわざ害することもない、と僕はそつとお布団から抜け出して障子を開けました。僕のお部屋はお庭に面しています。そう、白い手のお部屋のようじ。沈黙が聞こえるほどどの静けさが夜を包み込んでいます。あいにく今日はお月様もお休みのよう。また元気を取り戻してきたりしい風が雲を右から左へとそらついていきます。

やつぱり寝間着では少し肌寒い。ぶるる、と両腕で両肩を抱いて、僕はお布団の中へと戻りました。

明日華沢くんに会つたら、今日のことをおつつか。心配してくれてどうもありがとうございます。でも、あのお屋敷には何もこわいものなどなかつたよ、と。そういうえば、華沢くんはあの秀麗な瞳を安堵に和らげてくれるでしょうか。

でもその次の日。僕は学校には行けませんでした。朝、いつものよに起き上がろうとしたら、体の節々が痛んで動けなかつたのです。お母さんを呼ばうと口を開けたのですが、かすれたひゅうひゅうという声しか出ません。何だか呼吸をするのが苦しい。どんどんと重みを増していく体に鞭を打つて、僕は一生懸命手を差し出しました。おかあさん、と声にならない声をあげながら。

お母さんが、こつまでたつても居間にあらわれない僕を起にしき

と部屋に入つてきてくれて、僕はようやくお医者さまで看てもうされました。ひとしきり僕の体をお調べになつたお医者さまは首を傾げると、ただの風邪だとは思いますが……とお薬を渡して帰られました。

お薬を一日に三回も飲んで、お母さんが作ってくれるお粥を少しだけ食べて、それでも僕の風邪は一向に治る気配を見せませんでした。連日連夜、高熱は僕の体から精氣を奪い取り、自分一人では満足に食事も出来ないようになつてしましました。体の節々の痛みは止むことを知らず、視界はいつも霞んでいて、一体今が昼なのか夜なのかもわからない。咳をするほどの元気もなく、浅い荒い息が僕の口からは絶えず洩れています。

そんな状態がどれほど続いたのでしょうか。お母さんは、僕はこの部屋から動かなければならぬと言いました。どうして? そう聞きたかったのだけれど、それは言葉にはなりませんでした。

眠りとも呼べないほど浅い睡眠の中で、どうやら僕はおうちから運び出されたようです。気付けば、真新しい真白いシーツのひかれた洋風の寝台に横たわっていました。壁もお布団も部屋のドアさえもが真っ白です。寝具の横には小さな箪笥が置いてあつて、そこに花瓶がありました。活けてあるのは薄い夕闇の色。千鳥草です。それも、三本だけ。

ここにいればとりあえず安全だからね、とお母さんが言つります。泣いているみたい。どうして泣いているの。安全つてどういう意味なの。僕はお母さんと話がしたかった。熱をもつてじんじんする額にその手の平をのせて、大丈夫だからと微笑んで欲しかった。でも、僕が口を開こうと難儀しているあいだに、お母さんは部屋から出て行つてしまつたのです。

悲しい。そして、とても寂しい。心細い。僕は、これからどうなつてしまつというのでしょうか。

涙を流すにも体力がいるのです。そして、今の僕にはそれすらのちからも、もうない。そんな事実も、僕のこころをますます打ちの

めします。『じうじて。じうじて？』

「倉崎くん」

絶望に田を閉じた僕の耳に、声が聞こえてきました。聞きなじみのある声。久しく聞いていなかつた声。

蓮沢くん、と僕は言いたかつた。だけれど僕の声はあまりにも細すぎて、扉を後ろ手に閉める蓮沢くんには届かなかつた。

「警告、したはずだよ、倉崎くん」

苦々しいといった風に蓮沢くんが言いました。眉間に寄せられた皺は今まで見た中で一番深く、その顔は苦笑に満ちています。

「じうじて」

じうじて。それは僕が尋ねたかつた言葉。

「じうじて、このお屋敷に近付いたんだ。あれほど、ここには来るんじゃないと言つたらうつ。ぼくが冗談を口にしていたとしても思つたのかい」

このお屋敷。つまり、僕がいるのはあるお屋敷なのです。いつも見つめていた、白い手のお屋敷。僕はゆっくりと首を回して、花瓶の中の千鳥草を見ました。これは、僕があの白い手に渡したもの？ ではあの白い手はどうして行つてしまつたのでしょうか。

「いいかい、倉崎くん」

押し殺した声で言いながら、蓮沢くんが扉から僕の方へと向かってきます。体を機敏に動かせない僕への配慮なのか、蓮沢くんは千鳥草の隣、僕の田の前に立つと、

「キミの病は風邪じゃない。誰も治せない。どんな」立派なお医者さまでもだ。ただし、それを治す方法がひとつだけ、ある
そこでぐつと蓮沢くんは僕に顔を近付けると、怖ろしいほどに真剣な目で言つたのです。

「誰かの手に触れるんだ。キミの手が誰か他のひとに触れれば、キミは助かる。そのかわり、のままでは、キミは……、死ぬ」

「……」

「なんだい？ ぼくはここにいるから、ゆづくつと言つたまえ」

聞きたいことはたくさんあった。どうして僕はそんな病に冒されてしまったのか。どうして誰かの手に触れるだけで僕は助かるのか。どうして葦沢くんはそれを知っているのか。そしてあの白い手との関係は一体なんなのか。

「しろい、て…」

「キミは見たのだろう、この窓から出ていた手を。そしてそれに触れてしまつたのだろう。しかも花を媒介にしてまで。この病の奇つ怪なところはね、ただ手に触れるだけじゃダメなんだ。花を媒介にしなくてはならない。その媒介を通して病は人から人へと移つていくんだ。つまり、キミはその白い手からその病を譲り受けてしまつたんだよ」

「に、ら…さわ…くん、どうし…て」

「どうして、僕が知つているのかって？」

つと、自虐的に葦沢くんが口唇を歪めました。それはとてもやるせなくて哀しくて、何かぶつけられない怒りを内包した微笑み。一瞬、僕から目を逸らした葦沢くんは、しかしもう一度僕の瞳を真正面から見つめて、

「それはね。僕も、この病にかかつっていた者のひとりだから」と、呟くような声音で言つたのです。

「あのこはね、葦沢くん。キミがこの美しい千鳥草を渡したあのこは、僕が花を渡したこなんだよ。結果は真逆なものだつたけれど。僕はそのおかげでこうしてまだ生きている。キミはそのせいでこうして死にかけている。僕は、キミにはこんな思いを味わつて欲しくなかつた。だけれど、あのこの命が助かる機会をみすみす奪うこと出来なかつた」

ぱたり、と僕の頬にしづくが落ちてきました。そして、また一滴。葦沢くんは流れ落ちる涙を拭おうともせずに、僕を強く抱き締めると耳朵に囁きました。

「後生だよ、倉崎くん。お願ひだから生きてくれ」

だからね、これを読んでいる君。もし君が、窓から物欲しげにその指を彷徨わせていいる手を見かけたら、花を一輪持つて触れて欲しいのです。出来れば千鳥草がいいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5543d/>

花びら、ひとひら、ひとしづく

2011年1月15日02時37分発行